

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



私たちは、医療福祉施設を中心に設計を行っています。クライアントの想いを叶え、それが社会貢献につながる設計を目指しています。

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083 京都市中京区三条通柳馬場東入中之町 10 番地

TEL:075-211-7277 FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



2023 年度も 総合社会福祉研究所会員 福祉のひろば読者 の継続をお願いします。

国民の暮らしも、医療や福祉の提供体制も厳しさが増しているにもかかわらず、政府は医療や福祉ではなく、軍事費の増額、攻撃能力の保有に力を入れようとしています。一方で、現場からの公共を取り戻す運動は全国的に広がり、大きな力となっています。当研究所は諸活動や『福祉のひろば』を通じて、研究者や現場のみなさんとながら、学び合いながら、みなさまと一緒に社会保障・社会福祉を前進するための活動を続けてまいります。

つきましては、2月頃より、「2023年度会員・読者継続のお願い」をお送りさせていただきます。会員・読者の継続を、よろしくお願い申し上げます。

総合社会福祉研究所 個人会員 9,400 円（税込み）
福祉のひろば 読者 6,600 円（税込み）

総合社会福祉研究所 TEL06-6779-4894 FAX06-6779-4895

<http://www.sosyaken.jp/> E-mail: mail@sosyaken.jp

沖縄返還から50年 沖縄の問題を日本全体の問題に



県立平和記念公園 平和の礎 いし



首里城公園

コロナ禍で中止となっていた社会福祉施設経営者同友会主催の「沖縄・平和の学びと連帯ツアー」が、今年2年ぶりに再開しました。沖縄の歴史と現在、そして未来への展望をていねいに織り込んだ3日間のツアーは、博学多識の下地輝明さん（語り部）をはじめ、たくさんの方々に会い、深い学びの旅となりました。



第32軍司令部壕



第32軍の創設と司令部壕の構築

1941(昭和16)年3月、山内嘉治の防衛を目的に、第32軍が創設されました。同年12月、司令部壕の構築がはじめられ、神部師範学校など多くの学校や地域住民が動員されました。1945(昭和20)年3月、空襲が激しくなると、第32軍司令部は地下壕へ移動し、米軍に占拠されました。

第32軍司令部壕内へのようす

司令部壕内には、牛島満中尉が、兵隊募集をほかに定員100人の兵隊や戦時下の家族・学生、女性軍医などが暮らしていました。戦況悪化に必要な施設・設備が完備され、道路の両側には鉄線の一、二段ベッドが並べられました。毎生活はきりきりとした熱気と、騒音や寒暖な臭いの強いところもありました。

第32軍司令部の南移軌跡

1942(昭和17)年2月、日本軍司令部は、神部師範学校の校舎への転移を決定しました。水と通水を確保するため、神部を「捨て」にした跡地を拠点としました。3月27日、本拠地の神部を離れ、司令部の主要部分と共に南移されました。司令部の南移にも関わらず、軍民混在の集落のなかで、多くの自衛と住民が命を落とすことになってしまいました。

人気の観光地「首里城公園」の地下には、旧日本軍沖縄守備隊・第32軍司令部壕の遺跡が眠っています。焼失した首里城の再建と併せて、司令部壕の公開を求める声があがっています。

下の写真は、2012年に設置された司令部壕の説明板です。説明板の設置検討委員会がまとめた説明板の文案から、県の方針で「慰安婦」と「日本軍による住民虐殺」に関する記述が削除されています。しかも、設置された当初は、出所も日付も記載されず、どこに抗議すればいいかも不明。県民をはじめ検討委員会の元委員らが、同委員会の原案への復活を県に要望しましたが、結果的に内容が修正されることはありませんでした。



2022年5月15日、琉球新報が沖縄の日本復帰50年の節目にあたって、特別編成号を発行しました。特別号では、50年前の1972年5月15日付の琉球新報の紙面と同じ見出し「変わらぬ基地 続く苦悩」をつけて、現在も変わらない沖縄の基地問題を指摘しました。

沖縄にある米軍専用施設の面積は、沖縄本島面積の約15%を占めています。県民が集中して暮らしている本島中南部都市圏には、米軍基地が市街地を分断するかたちで、当該市町村面積の約1/5を占めています。

写真は、嘉手納町の道の駅から撮った嘉手納基地です。町の83%は米軍基地で、日常的におこなわれる飛行訓練の騒音は、基地周辺住民の生活に大きな影響を与えています。道の駅のなかにも騒音測定器が設置されていて、国が定めた基準値50～60デシベル以下に対し、視察時も90デシベルでした。米軍の飛行差し止めや健康被害に対する損害賠償を求める訴訟は、現在は第4次が係争中。原告は3万5000人を超え、過去最大となっています。



ぎのわん
 ◆ 2017年12月に宜野湾市の緑ヶ丘保育園に米軍ヘリからのものと思われる物品が落下した事故から、5年が経ちました。母親たちは子どもたちの安全を求めて、この5年間、声をあげつづけてきました。何度も政府要請をおこない、多くの政治家とも面談してきましたが、状況は一向に改善されていません。さらに、「自作自演」「普天間基地の周りに住みはじめたお前たちが悪い」などの誹謗中傷が相次ぎ、母親たちを深く傷つけました。そんな状況のなかでも、母親たちはあきらめず、「#コドソラ」（子どもの空を守りたい）を結成し、ネット署名活動等にとりくみながら、2022年12月には4度目の政府要請をおこないました。

かつて、沖縄出身の政治家である西銘順治（1978～1990年沖縄県知事）は、「沖縄の心とは？」と問われ、「やまとんちゅ（大和人）になりたいくて、なりきれない心」と答えたそうです。沖縄の声を届けようと訴えても訴えてもヤマトに冷たくされる。そんなヤマトと沖縄の関係性を表しています。今回のツアーでは、もっと沖縄の問題を「自分ごと」として捉え、これからの日本を問う、そのような願いも込めたものだったと実感しました。

（写真・文 黄 驥）

※視察のようすは今号のトピックスでも紹介しています。

●特集● 住民のための地方自治をあきらめない

〈東京都杉並区〉地域を変えるのは、学び合いと対話の積み重ね	東本 久子 11
SNSで広がる「つながる」可能性	小田部明香 17
〈静岡県湖西市〉“地域の病院”を住民と一緒に守り、発展させていくために	今田信勝／中村宇余／中村恵美子／青池則男 22
住民のための地方自治をあきらめない	
～地域の医療保障を進展させるとりくみ～	長友 薫輝 34

●トピックス●

年賀広告	38
もっとグラビア 戦争で国民は守れない	41
【PHOTO】社会福祉法人春日井福祉会	44

●連載●

WORK WORK——わくワク——	
手づくりこんにゃくをもっと届けたい！	作業所スクラム 48
ケア労働処遇改善キャンペーン！⑦	伊藤 賢太 50
同志を巻き込む100日後に一揆する看護師キャンペーン	
夕映えのとき～人生の終え方を支える実践～	
一人ひとりの人生の最期に寄り添える介護の仕事	岩田 あこ 52
座ることを考える	
歴史や文化のなかで発展してきた椅子②	増澤 高志 56
JOB & ACTION 全国福祉保育労働組合 (23)	
防衛費の増額ではなく、「基本給の引き上げ」と「職員の増員」を！	60
私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (23)	
本来の保育事業に専念できる環境づくり	高田 清十 62
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (43)	水野阿修羅 64
相談室の窓から 作業所のお休みが続くBさん②	青木 道忠 66
育つ風景 「保育園での虐待」ニュースの波紋	清水 玲子 68
映画案内 『8年越しの花嫁 奇跡の実話』	吉村 英夫 70
現代の貧困を訪ねて	生田 武志 72
コロナ災害を乗り越える・いのちとくらしを守る・なんでも電話相談会	
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート	
久々の写真モデルさんじゃ	ラッキー植松 74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜 76
花咲け！ 男やもめ	川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



平和を基礎に、つながり、 認めあえる地域へ

衛都連退職会会長 宮風 輝清

私は現役時代は堺市職員として仕事をしながら、労働組合運動をしたり、自治会の役員をしたり、ずっと住民運動にかかわってきました。私の活動の原点は、いかなる戦争にも反対！ という根底にある思いにあります。父が戦地で負傷して自宅治療のため帰還し、一年後に自宅で亡くなりました。父親のいない惨めさ、偏見と差別、いじめ等で学校へ行くのが嫌でした。当時は親がいないと就職が不利になるという差別があったので、私は祖父母の養子になり、戸籍上は父親と兄弟になりました。

最初にかかわった活動は、一九七一年に下水道問題で「つくのをよくする会」を立ち上げたことです。当時、堺市内での下水道の普及は旧市内のみで、戦前・戦後合併した地域はまったく計画ありませんでした。団地等が計画された地域だけが優先普及され、団地の汚水処理場を私たちの村へもつてくるのが計画されました。

「なんで私たちの村へもつてくるのか！」と住民が怒り立ち上がって、共産党の議員の協力を得て、保守系の人や地域のあらゆる方々と手を組んで反対運動をしました。商業新聞でも再三取り上げられて、堺市ではかつてない要求を前進させました。何十億という予算を勝ち取り、下水処理場悪臭除去工事・下水管早期導入を最優先させました。時代背景もあって、市当局からの運動団体への攻撃、赤攻撃はすさまじいものがありました。それでも私たちはあきらめず、ビラをまき、街宣活動をつづけたことで、市当局もお手上げの状況になりました。

一九八六年には自治会対抗駅伝大会を立ち上げました。ほかにも校区運動会、敬人^{けいじん}の集いなどを企画したり、スポーツを中心として住民の輪をつなぐことができました。自



みやかぜ てるきよ

1942年生まれ。1961（昭和36）年堺市役所税務課に入職。労働組合の役員をしながら31歳（昭和48年）で単位自治会長を、その後8回、副会長11年、校区自治連合会事務局長15年、堺市スポーツ指導委員会・副会長・常任委員等40年、大阪府・泉北地区・堺市校区・中学校等の役員を多数兼ねる。2017年、文部科学大臣表彰を受ける。

治会対抗駅伝大会は、現在も継続しています。

近年は、小学校で地域の歴史の学習会の講師になったり、地域の歴史伝承本『遣唐のひばり 伝承地』の編集をしたりしていました。子どもは次世代を担う宝物です。子どもたちに伝えていくことは、とても大切な活動です。

三年かけてつくり上げたこの本は、国会図書館や府立、市立図書館、校区内の小・中学校、近郊の小・中学校に配布し、また校区内の全家庭にも配布して、家庭のなかでも地域の歴史を話し合っていたく機会をつくることができました。『遣唐のひばり 伝承地』は、堺市文化財課の学芸員の方々、関係神社仏閣、藤井家文書、北村家文書、濱田家文書、諸出版社、朝日新聞社、揖保乃糸資料館、地域の方々等、多数の協力を得て完成しました。

また、幼稚園廃園阻止の住民運動にもかかわっています。校区連合会長は市の会議で廃園の了承をしましたが、それに反対する署名活動をおこない、市当局との交渉で撤回させることができました。

住民や地域の要求をくみ上げ、一緒に地域を住みやすくしていく運動は、平和であるからこそできたことです。住民とのつながりを重視し、地道な地域活動を通じて、地域の信頼を得られたことが、地域での共同したとりくみの基礎となっています。いつも他者の生きづらさに共感しお互いを認め合うことの大切さと、背伸びせず自分の歩幅で行動することなどができてきました。

住民のための地方自治をあきらめない

二〇二三年は、四年に一度の「統一地方選挙」の年です。四月に、全国で九八一の選挙がおこなわれます。それを受け、今号と次号の特集では、住民自治について考えたいと思います。まず今号では、東京都杉並区の区長選挙、そして静岡県湖西市で市立湖西病院の統廃合を阻止したとりくみを紹介します。

先月号の特集で浜矩子さんが、「『強いリーダーシップ論』というのは非常に危険」「リーダーは私たち国民」「政治は、私たちが指し示す方向にしか動かないというのが、本来の政治の姿」と話してくださいました。まったく同じことを、今号でインタビューに答えてくださった杉並区で子育てをしている小田部明香さんが、「杉並区はいま、市民が政治を引っ張っている感じがする」と話してくださいました。実感のこもったその言葉は、住民自治のあるべき姿を表しているようで、とても印象に残っています。

いっぽうで、杉並区で長く住民運動にかかわってこられた東本久子さんは、「ここまでくるのに何十年もかかった」と話されます。いろんな人たちととにかくつながり、学び合い、議論して、その積

み重ねの上に今があるということです。同じことを、湖西市の住民である今田信勝さんも話されます。「一歩一歩の積み重ね」「やったことを一つひとつつなげていくこと」……

私たちの日々の暮らしや仕事、自分や家族の生活を守りたいという思いと、政治や選挙の問題は、本当はとても近く、直結しているものです。ですが、日々の暮らしや目の前のことでいっぱいばいの私たちは、なかなかその向こうにある政治や選挙にまで目を向ける余裕がない、政治や選挙で自分の生活が具体的にどう変わるのかわからない、自分一人がなにをしても社会は変わらないだろう、という思いがあるのではないのでしょうか。

たしかに、政治を変えるためには、大きな力が必要です。ですが、その大きな力は、「大切なものを守りたい」という個人の思いと、その思いに共感し、応援する人たちのつながり、一人ひとりの学び合いの積み重ねであることを、杉並区と湖西市のとirikumiから教えてもらったように思います。

地域や社会をつくっているのは、私たち一人ひとりの市民です。政治家が社会をつくっているわけではありませんし、政治家を動かすのは、市民・国民の声です。目の前の子どもたちのゆたかな発達を守りたい、障害のある人たちのあたריまえの暮らしを守りたい、お年寄りの尊厳を守りたい、そうしたあたりまえの一人ひとりの願いが社会を変えていく力につながっていくことに自信をもって、一つひとつ、一歩一歩、積み重ね、つながっていくことを大切にしたいと思います。

(編集主任 申)